

平成22年5月26日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20720077  
 研究課題名（和文） アメリカ文学におけるドメスティック・イデオロギーの流通と定着、多様性について  
 研究課題名（英文） Domestic Ideology and Its Critics in the Antebellum Literature

## 研究代表者

増田 久美子（MASUDA KUMIKO）  
 駿河台大学・現代文化学部・准教授  
 研究者番号：80337617

研究成果の概要（和文）：本研究では、ドメスティシティという概念がいかに広範に19世紀米国社会の文化形成にかかわっていたかを検討するため、「白人女性文化」という支配的枠組みに抗して、黒人男性作家の家庭小説にみられるドメスティシティ分析を主眼とした。その結果、ドメスティック・イデオロギーが人種・ジェンダー・階級を横断して多様な人びとに共有あるいは流用されていたこと、また、このイデオロギーが個別の場において特殊な文化的政治性を持ちうるということが論証された。

研究成果の概要（英文）：This research explores black domesticity in Frank J. Webb's 1857 novel *The Garies and Their Friends*, examining how the ideology of domesticity involved the antebellum cultural formation. Against the common postulation that domesticity connotes the middle-class white women's culture, the research demonstrates that (1) domestic ideology was shared or appropriated by men and women with the intersections of race, gender, and class; (2) the peculiarities of cultural politics resided in local formulations of domestic ideology.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：米文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ドメスティシティという概念は、「男女の領域分離主義」や「感傷の文化」等の強力なイデオロギーとともに、その文化的・政治的意義が検証され、多様なテキストにおいて

再解釈されてきた。たとえば、ドメスティシティの基盤である「家庭」の創出は国家建設事業とパラレルな関係にあることが指摘され、また、合衆国の海外における帝国主義の先鋭化と国内におけるドメスティシティの

涵養とのあいだには、密接な共犯性がみられる点が論証されてきた。

(2) 上記のような研究動向のなかで、本研究の代表者は、アンテベラム期の女性作家による小説や歴史記述を通し、社会領野におけるドメスティック・イデオロギーの受容過程と政治・経済領野におけるアメリカ植民地主義の定着過程との同期的な関連性を考察してきた。政治・経済等の公的領域か切り離されていたと考えられてきた女性たちが、実際には、家庭という私的領域を基盤にしながら、当時の社会が直面していた多様な公的問題について、みずから政治的主張を唱道していたという知見を得た。しかし、通常のドメスティシティ研究の射程とする対象が白人女性に限定されているために、多様なかたちのドメスティック・イデオロギーを追究するには限界があることも認められる。

## 2. 研究の目的

(1) ドメスティシティ研究においては、すでに一定の成果が蓄積されてきたが、その研究対象は多くが「白人・女性・中流階級」に限定されてしまい、人種・ジェンダー・階級等が複雑に交錯して形成された19世紀アメリカ文化の本質を見落とし、危険性が存する。ゆえに本研究は、通常の研究対象が白人女性作家を中心とすることにたいして、黒人男性作家フランク・J・ウェブのテキストに焦点をあて、個別テキストにおけるドメスティシティの特殊な政治性を浮き彫りにし、そのイデオロギーの多様性の追究を目的とした。

(2) ドメスティック・イデオロギーは、19世紀米国社会において「家庭」の内外を分断する境界線、つまり、男女の領域を分界するレトリックとして認識されているように、その基盤は「家庭」という秩序化された女性の領域にある。だが、ウェブのテキストにおいては、反奴隷制と自由黒人の処遇をめぐる闘争の場に変化するという仮説をもとに、白人女性とは異なる「黒人ドメスティシティ」という新たな視座の確立が期待される。したがって、ドメスティシティが「白人女性文化」の枠組みを横断し、伝搬および拡大をしていく様相について、黒人ドメスティシティという角度から評価することをめざした。

## 3. 研究の方法

(1) ドメスティシティ研究の全体像を把握するため、これまでに蓄積されたドメスティシティ研究にかんする書籍や資料の収集・整理・再検討を行った。とくに、カプランの「マ

ニフェスト・ドメスティシティ」、メリッシュの「センチメンタル・マテリアリズム」、テイトの「ドメスティック・アレゴリー」といったドメスティック・イデオロギーにかんする諸概念についての調査および再考は、ドメスティシティ研究における基礎的知識として重要な研究基盤となった。

(2) 黒人作家フランク・J・ウェブの個人的背景や著作活動等を明らかにし、他の同時代作家や人物との関係性を把握するため、ウェブにかんする一次および二次資料を収集し、基礎的知識を獲得した。そのなかでも、ウェブの研究者であるロバート・リード・ファーやフィリップ・S・ラブサンスキらの先行研究は、ウェブの再評価や黒人文学史における再定置を実践しており、きわめて数少ないウェブ研究について重要な研究背景を提供した。

(3) ウェブの出生地であり、かつ、作品舞台となっているアンテベラム期フィラデルフィアにかんする歴史資料を収集し、とくに同地域の黒人中流階級コミュニティにかかわる社会的背景を調査した。そのうえで、ウェブのテキスト分析を開始し、逐次、研究ノートを作成しながら論考をとりまとめ、最終的には論文として発表した。

## 4. 研究成果

(1) フランク・J・ウェブの小説が1857年に出版された当時の受容について、書評等の一次資料はきわめて少ない。しかし、小説に奴隷制廃止論者らの序文が掲載されている点から、「反奴隷制小説」の部類として期待する読者が多かったと思われる（だとすれば、彼の作品はあまり好評ではなかったと推測できる）。また、黒人文学史的にみると、1960年代の公民権運動を背景にして『ゲーリー家と友人たち』が1969年に再版されたさい、異人種間混淆・人種暴動・パッシングなどのテーマが「本格的に」扱われているとされ、「北部の自由黒人の生活やさまざまな問題を描写した最初の小説として、のちの黒人小説を大いに予感させる作品」であるという一定の評価を得たにもかかわらず、作家自身は「独創的とはいえない周辺作家」という認識にとどまった。表面上、感傷小説を模した反奴隷小説と思わせるこの小説は、実際には北部社会における人種や階級の問題について「ドメスティシティ」を通して糾明した作品であったため、アンテベラム期の（とくに反奴隷制支持の白人）読者の賛同を得ることができず、また、20世紀の黒人読者にとっても、（黒人小説の伝統的特徴としての）抗議小説と呼ぶには「温厚」すぎるとして支持されな

かったのである。

(2) ウェップの小説は白人中流階級家庭を模倣したような北部自由黒人の家庭生活が中心的に描かれているため、「白人の価値観の同化」およびその追従という点において過小評価されてきた。だが、白人女性作家たちの家庭小説や感傷小説にみられる「ポリティクス化されたドメスティシティ」を、「家庭の秩序を基盤とした母親的・政治的言説によって、社会改革が目指されるドメスティック・イデオロギー」として措定するとき、黒人女性作家たちがそのようなイデオロギーを利用した場合には、ドメスティシティは人種と性的抑圧への抵抗として機能する。そして、男性黒人作家であるウェップがそうしたドメスティシティを流用したとすれば、それはたんなる白人の価値観の受容や模倣を示して白人社会への同化を表明したのではなく、アメリカ黒人として何らかの改革を試みたと仮定しうる。ゆえに、本研究では黒人ドメスティシティを通して、アンテベラム期の自由黒人たちの抵抗や黒人コミュニティにおける自治能力の実現性、さらには、かれらが黒人であると同時にアメリカ共和国市民でもあるという「シチズンシップ」の確立についての可能性をも模索できる。

(3) 『ゲーリー家と友人たち』には、南部の裕福な白人農園主を当主とするゲーリー家と、北部フィラデルフィアの黒人コミュニティに暮らす黒人中流階級家庭のエリス家というふたつの家庭が登場する。この南北の対極的な両家は、その生活背景が「南部の貴族的奴隷制社会」にたいする「北部の近代的市民社会」という対立項を基盤とし、さらに、ゲーリー家は人種統合という夢想を、エリス家は純然たる黒人種によるドメスティシティ形成の可能性をそれぞれに表象している点に、テキストの重要な意図がある。ゲーリー家の4名がフィラデルフィアに移住し、北部社会にて悲劇的結末を突きつけられることを鑑みると、ゲーリー家に象徴される異人種間混濁は全面的に否定されていることがわかる。

本研究で依拠するドメスティシティという概念は、汚濁や不浄とみなされる男性的空間の「市場」から切り離された、「家庭」という女性の領域を基軸とするドメスティック・イデオロギーについて政治化されることであり、秩序や規律あるドメスティシティを通して近代的主体性が産出されるという機能を前提としている。さらにアンテベラム期アメリカの場合、奴隷制によって家庭内に混入される無秩序や不浄から「家庭」を救出する必要が生じるため、奴隷制という汚濁に抗して求められる家庭内の秩序こそ、言説上の

「清潔さ」にはほかならないと規定できる。すると、ウェップの小説においては、ゲーリー家の邸宅にはまさに奴隷制という汚濁と異人種間混濁という不浄が最初から侵蝕しているため、ドメスティシティおよび「公的領域／私的領域」のイデオロギーが欠如しているといえる。いっぽう、エリス家では、清潔さへの執着を体現する黒人少女（「誰よりも根気のある家政担当」と描写される次女）によって、家庭内の人種的汚濁が一掃され、黒人種の純粋性が維持されている。

(4) 歴史的にアンテベラム期フィラデルフィアは北部最大の自由黒人人口を擁するだけでなく、黒人指導的人物を多数輩出し、黒人運動の拠点としても、ニューヨークとともに重要な黒人コミュニティを形成していた。また、同コミュニティは中流階級の他に、黒人富裕層の洗練された生活や種々の組織の存在という点でも知られていた。そのような自由黒人たちの「白人中流階級の模倣」と揶揄されてきた営みが展開されるいっぽうで、実際には酷烈な人種差別にもさらされ、1834年から1849年のあいだに大規模なものだけでも5度にわたる人種暴動が生じている。

テキストにおいては、白人暴徒が黒人コミュニティを攻撃する描写を通して、アンテベラム期北部社会での人種暴動という社会的・歴史的現実を読者に提供している。この反黒人暴動によって黒人家庭の領域は人種闘争の中心地となり、ウォルターズという黒人男性の邸宅（家庭）を主軸に、黒人コミュニティおよび黒人ドメスティシティを強固にする契機となっている。

小説の事実上の英雄的人物ウォルターズは、元奴隷ながらその知性と勤勉さにより莫大な財をなすフィラデルフィア随一の黒人富者であり、「英雄的奴隷」の系列上に位置づけられる非アフリカの容貌の男性である。人種暴動のさい、コミュニティの黒人たちは白人暴徒にたいする防衛のためにウォルターズ邸に結集し、彼の指揮のもとに応戦する。とくにエリス家の次女は、家庭の領域という女性的空間であると同時に「要塞」と化した非女性的なウォルターズ邸において、白人暴徒という汚濁ないし異質なものの侵入を防ぎ、一掃するという「一家の守り手＝ハウスキーパー」としての役割を担う。

テキストにおける人種暴動によって判明されたのは、奴隷制および異人種間混濁の絶対的否定、そして、黒人と穢れを同一視していた当時の一般概念を反転させ、白人という不浄を家庭の領域から排除し、内部空間を浄化するという黒人ドメスティシティの確立である。さらには、ウォルターズはトゥーサン＝ルヴェルチュール（ハイチ独立運動の指導者）との重複性・同一性から、「解放者」

であるばかりか、黒人でもあり、かつアメリカ共和国市民でもあるという〈アメリカ黒人〉の証左として読みうる可能性をも示している。したがってウェッブの小説は、黒人ドメスティシティという視座から分析したうえで、アンテベラム期米国社会において模索されうる新しい黒人像が提起されていると結論づけられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

増田久美子、「ホームから要塞へ——フランク・J・ウェッブ『ゲーリー家と友人たち』における黒人ドメスティシティ」、『駿河台大学論叢』第38号、査読なし、2009年、23-37頁。

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

増田 久美子 (MASUDA KUMIKO)

駿河台大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：80337617